

# 世界の若者たちへ 地下鉄サリン、国連HPに



高橋シズエさん（右）に、地下鉄サリン事件について取材する米国人ジャーナリストのチャーリー・ライオンズさん＝2013年12月、東京都中央区

「今の若い人たちは、現実のこととして分かっていないと思う。それがすごく怖い」。1995年3月の地下鉄サリン事件で、営団地下鉄（当時）職員だった夫を亡くした高橋シズエさん（67）の声などとともに、大量破壊兵器による被害の悲惨さと拡散防止を訴える映像が、国連のホームページで公開された。

国連の委託を受けた米国のフリージャーナリスト、チャーリー・ライオンズさん（54）が取材、制作した。日本国内の取材は、地下鉄事件から来年で20年となるのを前に、「語り継ぎたい」との思いを強くしている高橋さんが全面協力した。ライオンズさんは「つづいた事件は、世

界のどこでも起り得る。被害者の声を聞き、事件を忘れないことは非常に重要だ。映像がら、被害者が今も苦しみ続けていることを理解してもらえたら」と話している。映像は約16分。地下鉄事件のほか、ブラジル中部ゴイアニアで87年9月、放置された放射線治療器具の放射性

## 「語り継ぐ」被害者の強い思い

物質を持ち帰った住民らが大規模に被ばくし、直後に4人が死亡した事故を、いずれも発生当時の映像も交え紹介、被害者や遺族、研究者らに話を聴いている。大量破壊兵器のテロリストへの拡散防止を加盟国に求めた2004年の国連決議にも触れ、潘基文事務総長は「各国は決議実行の努力を強めてほしい」と話した。

ライオンズさんは昨年12月中旬に来日。地下鉄サリン事件の現場の一つとなった籠ヶ岡駅を訪れ、高橋さんにインタビューした。地下鉄事件のほかの被害者にも取材しており、ライオンズさんは今後、新たなウェブサイトを立ち上げて映像を公開する予定。

若い世代に事件を伝えようと、当時を知る人からの証言を集めている高橋さん。「サリンがシリアなどで使われたことを考えると、日本が経験した悲惨さは決して忘れてはいけない。国連が私たちのことを取り上げてくれたことに感謝したい」と話している。

映像は <http://www.unmultimedia.org/tv/21stcentury/> で視聴可能。